

佳作

『虐殺器官』 伊藤計劃著

法学部 1年 栗原実希

「虐殺器官」私はこの題名の響きの良さに惹かれた。器官とは自分の身体を構成する一部分である。自らの器官が自らを死に至らしめるのか、虐殺を引き起こす器官とは何か、それが知りたかった。

舞台は近未来の世界である。9. 11以後、アメリカはテロ対策のため徹底した個人認証セキュリティシステムを導入していた。一方、後進国では内戦や紛争が増加していた。そんな中ある人物の存在が浮かびあがる。ジョン・ポール、言語学者である。この学者が訪れる国で次々に虐殺が引き起こされる。アメリカの軍人クラヴィス率いる暗殺部隊は、虐殺の原因を掴むためジョンを追う、という話だ。

私が本書を通して考えたのは、「言葉」についてである。言葉は人間しか使わない。本書では、「言葉は人間が生存適応の過程で獲得した進化の産物である。」と述べられている。私もそう考える。人間は言葉を使用して他者と会話をし、自己を発見した。また、私達は言葉を使って自らの思いを表現し、社会をつくりあげた。私は今まで様々な言葉を発し、他者からの言葉を享受してきた。言葉により励まされることもあれば、傷つくこともある。言い方の違いでトラブルになったり、仲良くなったり、私達が生きていく上で言葉は極めて重要な役割を果たしていると思う。私は言葉が好きだ。特に読書をしている時にそれを感じる。私はもっと自分の思いを他者に上手く伝えたい。自分の思いを的確に伝える言葉を見つけるために、本を読んでいる。

本書では、ジョン・ポールが見つけた「虐殺の文法」により、虐殺が引き起こされる。ジョンは言語を研究していくうちに、人々の言葉の中に潜む暴力の兆候が見えるようになった。「虐殺の文法」をまだ虐殺の兆候が無い地域にばら撒き、その効果を試した。進化の産物であるはずの言葉が人間を滅ぼす。自らが作りだした器官により滅ぶとはなんという皮肉であろうか。

本書の著者である伊藤計劃は、34歳の若さで亡くなった。

「虐殺器官」執筆以前から病魔と闘っていた伊藤の作品には、生命や魂のことが多く書かれている。しかし、伊藤の作品から死の匂いは感じない。「虐殺」という題材を扱っているにも関わらず絶望を感じない。むしろ、読後に清々しさを覚える。また、本書は主人公の目線で語られているが、外からこの物語を傍観している気持ちになる。おそらく、伊藤がキャラクターを操る監督のような立場で話を書いているからだと思う。

携帯電話やパソコンの登場により、自分で言葉を紡ぎ出す機会は少なくなった。端末によって予測された言葉は本当に自分が伝えたいことなのか。無機質な画面に映し出された文字を追いかける時、言葉の温度を感じているだろうか。時には端末の電源を落とし、生身のひととの生き生きとした会話を、紙の本に連なる言葉の温かさを感じて欲しい。貴方も、伊藤計劃の遺した言葉に、思いに触れてみてはいかがだろうか。